

□海外文献紹介□

胃リンパ腫に対する
最近の集学的治療の成果

Recent results of multimodal therapy of gastric lymphoma: *Shiu MH, Nisce LZ, et al* (Cancer 58: 1389-1399, 1986)

原発性胃リンパ腫の取り扱いはいは1970年以降、(1)内視鏡診断、(2)拡大胃切除の回避と術後早期の補助療法、(3)高線量広範囲の放射線照射、(4)多剤併用化学療法の導入、により大きく変貌し治療成績も向上してきた。著者らは1971～1982年の原発性胃リンパ腫46例について、診断治療の進歩による成果を検討した。病期分類(Ann Arbor)はI-E 20例、II-E 9例、IV 17例で、深達度はm～sm 8例、pm 11例、s以上19例、不明8例であった。

治療の原則は手術であり、原発巣の切除により出血と穿孔のリスクが

除去され、肝、脾、リンパ節の検査により確実な病期分類ができた。術後、病期に従い、全腹部または胃床、上腹部への照射およびCHOP(cyclophosphamide, doxorubicin, vincristine)を主にした化学療法が行われた。全症例の治療概要は、病期I-E, II-E, IVのそれぞれについて、切除のみが4例、1例、0例、切除+照射が11例、3例、1例、切除+化療が3例、0例、1例、切除+照射+化療が2例、2例、8例、生検+照射+化療が0例、2例、3例、生検+化療が0例、1例、4例であった。

平均経過観察期間は61か月(最短30か月、最長14年)で、各病期の5年生存率はそれぞれ95%、78%、25%であった。手術死亡はゼロ。病期I-E, II-E症例においては、切除、照射療法、および化学療法の後に腹

部再発を認めた症例は1例もなかった。

外科的切除は胃リンパ腫の高々30～60%しか治癒させることができないことはよく知られており、放射線治療と化学療法併用の有用性が報告されている。特に病期I-E, II-E症例に対するこれらのより有効な補助療法が発達し、胃リンパ腫は治癒率の高い疾病となってきた。事実、この研究でもI-E症例の5年生存率は95%、切除できたII-E症例のそれは100%で、1949～1970年に経験したI-EおよびII-E症例の5年生存率63%と比較すると、著しく改善され、病理判定技術の差によるバイアスを考慮してもなお、切除後の放射線治療と化学療法併用の有効性が確認できた。

(愛知県がんセンター第1内科

種広健治 抄)